新潟県の咳喘息の検討 —2006、2008、2010年の経年変化

藤森勝也[1)]，　庄子　聡[1)]，　木島朋子[1)]，　各務　博[2)]，　高田俊範[2)]，　成田一衛[2)]，
長谷川隆志[3)]，　鈴木栄一[3)]
新潟県立柿崎病院[1)]
新潟大学大学院医歯学総合研究科[2)]
新潟大学医科総合診療部[3)]

【背景】2006年の新潟県の調査では、喘息に占める咳喘息の頻度は5.4%、治療にもかかわらず起床時、寝る前に咳が出る症例はそれぞれ35%、25%であった。

【目的】2006年に引き続き、2008、2010年に喘息に占める咳喘息の頻度と実態を、アンケート調査した。

【対象と方法】2006、2008、2010年9月、10月の2ケ月間の新潟県内の喘息患者を対象とした。特に専門医が配置されている大学、病院症例を検討した。年齢、性、罹病期間、喫煙歴、ここ2週間の喘息発作の頻度、ここ2週間の症状、日常生活への満足度を調査した。同時に担当医師が、総IgE値、「咳喘息である、咳喘息でない、不明」、治療内容等を記入した。

【結果】典型的喘息と比べて、咳喘息は調査年代によらず、女性に多く、罹病期間が短く、喫煙歴がない、起床時や寝る前に咳が出る、血清IgE値が低いことが特徴であった。経年変化では、頻度は、5.4%、7.6%、6.2%とほぼ横ばい、調査時2週間の発作（咳）がない症例が58%、68%、72%と増加し、吸入ステロイド薬処方が80%、91%、89%と増加した。しかし治療にもかかわらず、咳が出る症例がまだ28%あり、咳治療は難しく、さらなる介入が必要であると考えられた。